

加藤周一とフランス文学  
理性」と民主主義

一九四〇年代後半の「

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-06-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: lwatsu, Ko メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.24517/00054283">https://doi.org/10.24517/00054283</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



## 加藤周一とフランス文学——一九四〇年代後半の「理性」と民主主義

岩津航

### 一 一九四六年の反翻訳主義

加藤周一（一九一九—二〇〇八）は、同じ「マチネ・ポエティク」グループに属する中村真一郎、福永武彦との共著『1946・文学的考察』によって、本格的に文壇デビューをはたした。この文学エッセイ集は、雑誌『世代』に一九四六年七月から十二月にかけて、「CAMERA EYES」の表題のもとに五回連載され、書き下ろしの四回分を加えて、一九四七年五月に真善美社から刊行された。三人の著者は「焦点・時間・空間」のトピックに相当する記事を順番に担当した。「焦点は現代日本の現実を、時間は任意の古典を、空間は海外のニュースを、問題の出発点として捉え、自由な方法と形式とで、筆者の意見を展開させた」というものである。著者たちは総題が示すように、文学を出発点として「敗戦第二年の日本」を考察した。

加藤周一が書いたのは、次の九篇である。①〜⑤は連載、⑥〜⑨は単行本書き下ろしにあたる。

**焦点** ①「新しき星莖派に就いて」④「焼跡の美学」⑦「知識人の任務」

**時間** ③「一九四五年度のウエルギリウス」⑥「金槐集に就いて」

⑨「寓話的精神」

**空間** ②「或る一冊の亡命詩集の余白に」⑤「我々も亦、我々のマンドリンを持つてゐる」⑧「オルダス・ハックスリーの回心」

まず目を惹くのは、選択された文学作品の言語である。「時間」では、ラテン語（③ウエルギリウス）、日本語（⑥源実朝）、フランス語（⑨ラ・フォンテーヌ）の古典を取り上げ、「空間」では、ドイツ語（②ヘルマン・ナイゼ）、フランス語（⑤ジャン・リシャール・ブルック）、英語（⑧オルダス・ハクスリー）の作品を論じた。そこに見られるのは、徹底した反翻訳主義である。第一回連載の冒頭「焦点」を飾る「新しき星莖派に就いて」では、戦中から戦後にかけてのルルケ受容を厳しく批判した。批判はおもに歴史的現実を無視して文学を逃避の場とした学生に向けられているが、同時に外国語の

原文を読めないことも批判の対象になっている。

リルケが流行したのではなく、徹底的に誤解されたリルケが、翻譯を通して、相言葉になったのである。「略」元來、リルケを口にしない青年は殆どなかったが、リルケを読んだ青年も殆どなかった。試みに、最近リルケに就いて書いた星蕪派の詩人乃至は詩論家の任意の十名をとつて「悲歌」を與へ、解釋の答案をつくらせれば、抑々リルケの流行が何であり、星蕪派のドイツ文學理解が何の程度のものであるか忽ち明白になるであらう。例へば、中の五人は全く獨逸語を解さない。三人は獨逸語を解するが、「悲歌」は讀んでゐないと白状する。多くて二人が讀んだこともあり、翻譯も出来ると云ふにすぎないであらう。しかも恐らく彼等二人とも仏蘭西の象徴派に通ぜず、従て決定的にその影響の下にある。「悲歌」もリルケも正當に理解することは不可能である(2)。

挑発的な言辭であり、当然のことながら反発も多かった(3)。こうした原文主義は、マチネ・ポエティックの詩人たちに共通する態度だった。「真に勉強しようと思つたならば、なぜ原書を自ら読むことをしなかつたのだらう(4)」と福永武彦は言い、中村真一郎は、モリーヤックの流行は「日本語への翻訳と云う恵条件に災いされて、結局は学ぶところ少くて、終わってしまったらしい(5)」と嘆く。逆に言えば、原文主義こそが、彼らの自信を支えていた。

確かに原文で読むことは、外国文學研究者にとっては当然のこと

である。しかし、外国語を読むことは、同時代の日本人とは異なる思想を知る契機となる。そのことは、当時は危険でさえあつた。中村らは電車の中で話す際にラテン語を隠語として使つていたが、それは同時代の日本人との距離をさらに広げたはずだ(6)。後年の回想で加藤は次のように述べている。「身の周りには同時代の文學がない。やむことをえず、私は、あるいは私たちは、フランス文學のなかに同時代を見出そうとした。「略」フランスの作家たちは、ファツシスムと戦争に対し私たちが理解することのできるような態度をとつていたという点において——その態度は積極的な反対ばかりでなく、無視をも含めての話だが——私たちの同時代人にちがいがなかつた(7)」。加藤は同時代の(つまり戦時期の)日本文學よりも、フランス文學の方に共感を覚えたのである。

東大の医学部生ながら仏文科にも出入りしていた加藤は、戦局の悪化とともに同時代の図書や雑誌購入が滞るなかで、研究室所蔵の一九三六年から一九三九年頃の『新フランス評論』や『ウーロッパ』を読み漁つた。ジャン・リシャル・ブロックやジャン・ゲノーなど共産党系の作家への関心は、こうした雑誌を通じて深まつた(8)。外国語の読書は日本の日常からの脱出とともに、「世界」とのつながりを意識させた。逆に言えば、仮想された世界(フランス)との連帯感、戦後になって、日本の現実に立脚していないというマチネに向けられた批判を生む原因ともなつていくのである。

フランス文學に依拠して同世代を批評することは、ヨーロッパ人の立場に自らを置くことにつながる。竹内好が彼らの原文主義を「下

レイ根性」の産物だと批判したのは、そのためである。そのうえで、加藤はヨーロッパ人になろうとすることが植民者の論理の内面化であることを自覚しているだけ、他の外国文学者よりも優れている、と評価したのである(9)。竹内は同じ文章で吉川幸次郎を痛烈に批判している。中国語に熟達することが長きにわたって日本の知識人の条件だった歴史に鑑みると、マチネの反翻訳主義は、日本文学と外国文学との関係の一つの典型を示していると言えるかもしれない。

## 二 「世界文学」との関係

現在では戦後文学の批評を代表する論集として評価されている『1946』だが、発表当時は実作者のマニフェストとして書かれ、またそのように受け止められていたことを忘れてはならない。福永武彦と中村真一郎だけでなく、加藤周一も当時は小説家として立とうとしており、一九四六年から一九四八年にかけて、「夢の後に」(『高原』第二号、一九四六年十二月)、「三つの話」(『綜合文化』一九四七年九月)、「悪夢」(『人間小説集』別冊1)、鎌倉文庫、一九四七年十二月)、「黄金の家」(『思潮』第七号、一九四八年二月)などの短篇を発表し、詩人・小説家としても活動していた。中村光夫は「貴君たちは單に新しい詩、新しい文學を語つてゐるのではなく、新しい詩人または新しい文學者として語つてゐるのです(10)」と指摘し、平田次三郎も実作への期待を次のように述べている。

中村真一郎、福永武彦、加藤周一の三人が敗戦後の一年間に書きまとめた文學的エッセイ『一九四六年・文學的考察』といふ書物は、この世界的視野の廣潤さと論理的明澄さにおいて、ほくらを驚嘆せしめたのだつたが、中村君も福永君も加藤君も、そろつて小説の筆をとり、いはゆる《文學的實踐》をなしつつあることは喜ばしい。中村君は『一九四六年』發刊の折、この仕事はほくらの本質的な仕事ではない、と語つたものだが、小説をもつてより本質的な仕事と考へてゐるわけだらう(11)。

実作者としての課題をもつとも端的に論じたのは、福永武彦である。「人間の發見」で、彼は「世界文學」のレベルへ日本文学を押し上げるべきだと主張した。到達点、または参入すべき対象としての「世界文學」が存在するという認識は、当時の文學界でほぼ共有されていた。フランス文學者の伊吹武彦はその名も『世界文學』という雑誌の座談会で、「日本文学を世界文學にまで高めるには、世界的な意識をもつて、人類の中に於いて孤独を感じ、ものを見且書くといふことが大切だ(12)」と主張した。つださうきち(津田左右吉)は、「民族の文學において世界的意義の多いのと少いののけぢめがある。さうしてそれを考へることが文學の比較研究の意義である」とし、日本文学を世界文學に高めるために文學研究が必要だと説いた(13)。マチネ同人の試みを西洋模倣だと激しく批判した十返肇でさえ、「現在、彼らの作品は何れも各自獨特の個性を有せず、同じようなお手

本を見習っている。これでは結局個性もないのみならず、日本文學を世界文學圏へ解放させることなどは及びもつかないであろう(14)と述べ、同じく日本文學が世界文學に参入するための条件について語っている。いずれも日本文學を世界文學に接続させる必要性とその方法を示唆するものである。

加藤は『1946・文學的考察』において「世界文學」という言葉は用いていないが、一九四八年に書かれたテキストでは、フランス文學への関心を世界文學への関心と重ね合わせている。

私の現代フランス文學に対する関心は、第一にそれがフランス文學即ち私の世界と異なる世界の文學ではなく、ヨーロッパ文學であり、世界文學であり、辺境にはあるが同時に私もまたそのなかに住んでゐるといふ事実による。代表的なものを選ぶのは、便宜の問題にすぎない(15)。

加藤もまた、フランス文學と日本文學との連続性を意識していた。これに対して、小田切秀雄は、「フランス文學にもたれかかつて觀念的に現實の日常性を克服しようとする加藤周一・中村眞一郎たち」を、「フランス象徴詩をまねて日本語のしたがつてまた日本人の生活の現實に根ざさ(16)」ないとして、批判した。

とはいえ、加藤が日本の現實を知らなかったわけではない。むしろ、日本の敗戦という現實を直視し、敗戦に至るまでの文化は価値がないと判断したがゆえに、徹底的にこれを批判したのである。と

りわけ彼が嫌悪したのは、日本独自の文明を主張する軍国ナショナリズムだった。幻想の日本文明を誇示することが国民に戦争遂行を容認させたのだとすれば、これと決別するためには、日本が「後進国」であることをあえて強調しなければならぬ。「愛國心とは、祖國の現實を直視し、現實の上にたつて國を愛することであり、現實を歪曲して、架空の光榮をチンドン屋の如く騒ぎたてることではない(17)」からである。「支那と印度と歐羅巴とがある世界に、日本を附加えて、第四の要素とするのは、歴史のペルスベクティヴを破壊する、荒唐無稽な空想にすぎない(18)」のであり、「西洋と東洋とを對立させ、日本精神を漠然と東洋の代表だと考へる習慣は、更めて云ふまでもなく、論者の低能を廣告する以外に、全く意味のないものである(19)」。これらの批判は、有名な座談会「近代の超克」(一九四二)を念頭に置いたものと思われる。西洋の物質主義の限界を日本の精神主義が超克する、という議論は、ヨーロッパを非歴史的な機能主義においてのみ受容してきた日本の近代觀念を如実に反映していた(20)。

これに対して加藤は、ヨーロッパの物質的条件ではなく、その近代を支えた精神を文學を通じて分析し、それを戦争に至った近代日本の精神主義と對比させようとした。では、ヨーロッパ精神を「代表」するフランス文學は、戦後日本の文學者にとって、いかなる点において学ぶべき対象だったのか。それは、彼が一九四〇年代にくりかえし用いた「理性」という言葉に注目することで明らかになる。

### 三 「理性」の三つの用法

敗戦後の一九四〇年代後半に、加藤周一は頻繁に「理性の文学」を理想として語っている。ただし、その「理性」という言葉は、大きく分けて三つの文脈で異なる意味を帯びて用いられている。

第一に、現実判断能力としての理性。軍国主義が蔓延し得たのは、理性が抹殺され、あるいはみずから理性を放棄した結果、人々が現実判断能力を失ったためとされる。すなわち、日本の戦争は理性の欠如によって生じた、と加藤は考えたのである。その代表が、彼が「新しき星董派」と名づけた、戦争を漫然と支持した学生たちである。彼らは「現實に對して無力な哲學、歴史を判斷することの出来ない思想(21)」の持ち主である。判断するための材料は少なかったかもしれない。だが、「何も知らされてゐなかつたと云ふ程、拙劣な辯解はない。一片の理性があれば、三歳の童子といへども、太平洋戦争の結末を知り得た(22)」、と加藤は喝破する。では、なぜ星董派は理性を欠いていたのか。それは彼らの理性を麻痺させるプロパガンダのせいである。これには、ジャン・リシャール・ブロックの言葉を借りれば、ステレオタイプの伝統を喧伝する「マンドリン」の伴奏が必要だった。

皇国日本のマンドリンは、萬葉の精神、もののはれと幽玄と武士道、少し無造作に云へば、西洋の物質文明に對する東洋の精神文明である。マンドリンの弾き手は、主に、國文學者から成る一

隊であつて、軍國主義政府の弾壓政策が、國內の凡ゆる文化を破壊し、一掃した戦前及び戦争中の精神的荒野に、賑々しく登場し、陰險に便乗し、盲目的に支配し、世の青年子女を毒して、その理性を麻痺させるために、狂信的で、煽情的な歌を、歌いつづけた。皇国日本は、民主々義日本になつても、マンドリンの弾き手は、一應沈黙するか、更めて便乗し直してゐるとしても、彼等が毒した良家の子弟は、容易に理性の道に戻らうとはしない(23)。

文学はナシヨナリズムの醸成に大きな役割を果たした。加藤が理性的な文学を求めたのは、まさに文学が判断力としての理性を麻痺させる道具として使われたことへの反省があつたからなのである。第二に、現実を抽象的次元で認識し、それを表現に還元する能力としての理性。文学は感情を直接的に述べるのではなく、世界を分析的に把握したうえで、適切な言葉に置き換える作業である、というヴァレリー流の考え方を敷衍し、加藤は実作者として、理性を發揮した文学創造を要求する(24)。

單なる感覺的所與の自然な記述は、現實に描寫ではなく、單なる感情の告白は、人間の社會的乃至形而上學的存在を説明しない。現實を認識すると云ふことは、現實を理性に依つて構成すると云ふことだからだ(25)。

文學の傳統は、何よりも先づ技術の傳統であり、技術は先づ混沌

の中に秩序を見、現象のなかに現實を見、感覺的所與から世界を構成する理性のはたらきである。作家が、市民社會の現實を描かなかつたとすれば、これは單に市民社會の未成熟と云ふ外部の條件の歴史的必然にのみ依るものではない。描き得る如何なる手段も、想像力も、文體も、そもそも歴史的必然の相の下に社會を見る客觀的理性も、彼の手のなかにはなかつたのだ(26)。

ここで批判の対象になっているのは、私小説的なりアリズムと誇張的なロマン主義である。それはすなわち、日本の近代小説の主流でもあった。そして、そのいずれもが、軍国主義の台頭と支配に対して無力だった。一七世紀のラ・フォンテーヌを論じながら、加藤はアリズムとロマン主義を痛烈に批判する。

寓話的精神は、一切の無駄を排除して、本質のみをめがける。客觀描寫と云ふ一九世紀末の小説手法、又日常生活の記録的文學が捉へようとする殆どすべてのものは、棄てられるべき無駄にすぎない。浪漫派文學と個人的感情の凡ゆる形式の告白とは、何等の價値を有たぬ精神的浪費にすぎない。問題は、人間性の本質であり、その理性的認識であつて、又そのみである(27)。

第三に、認識をもとに行動する能力としての理性。これは、戦後の文脈では、「民主主義」の形成に積極的に参加することである。加藤は、知識人とは「民主主義革命のイデオログ、眞に理性のため

に語る(28)」者だと定義し、星莖派は「人民と理性にとつては無用の長物(29)」だと批判した。

一八六八年が、日本の理性と人間性とを解放しなかつたのは、斷じて教育の問題ではない。教育は惡辣であり且有效であつたが教育は自らその方針を定めたのではない。教育をしてその方針をとらせたもの、教育を決定したものの問題である。されば我々の課題は、その根源に對し、徹底的破壊を加へることになればならない。即ち社會組織そのものを、ポツダム宣言の示す如く、徹底的に、民主主義的合理的に變革し、日本の人民を解放して、我々日本の人民の中に理性と人間性とを育てることではなければならない(30)。

「民主主義的合理的」と並列で表現されているのは、民主主義が議論の積み重ねによつて達成されるべきものだからである。ここに見られる「人民」や「革命」といった左翼的な言辭は、一九四〇年代後半の加藤が共産党にかなり近づいていたことを示している(31)。戦時中に思想を表明し行動することができなかった加藤は、これからの行動を宣言することで、戦争プロパガンダに加担した年長の知識人(「國文學者」)や、プロパガンダを受け入れておきながら、戦後に至つてもそれを反省しない同世代(「新しき星莖派」)との差別化を図つた(32)。加藤は「民主主義」へ積極的に加担することで、戦後の文學者としての社会的責任をとろうとしたのである。

#### 四 戦後日本と一八世紀フランス的理性

日本の戦後は、アメリカによる占領とともに始まる。加藤は広島における日米合同原爆調査団に参加し（一九四五年十月―十二月）、アメリカ人軍医の合理主義が生活の隅々にまで徹底しているのを目のあたりにした衝撃を語っている。

一八世紀と近代とは、超克されたのではなく、亜米利加に延長されてゐる。しかも、私がそれを目撃し、體驗したのは、巴里街頭に於てではなく、極東の民族學的環境に於てであつた。誰がアナクロニズムを感じるであらうか。生きてゐるこの一八世紀的理性こそは、今この戦争の間にも、乾燥血清をつくり、新しい血液型を發見し、ペニシリンを工業化したのではなかつたか、亜米利加は、はじめて、私自身の問題となる。亜米利加のなかにある歐羅巴ではなく、亜米利加の亜米利加的なものが、私の關心の對象とならざるを得ない（33）。

「亜米利加に學び理性をもとめるための方法敍説」という強烈な題名をもつこの論考で注目すべき点は、アメリカ的合理主義が一八世紀フランスの延長上にある、と加藤が考へている点にある。彼の関心は「亜米利加のなかにある歐羅巴ではな」と断つてゐるものの、「生きてゐるこの一八世紀的理性」が予想されるべき場所として、

まず「巴里街頭」が挙げられていることから、この一八世紀的理性とはフランス啓蒙主義を念頭に置いたものと判断される。

一八世紀フランスは王政とカトリック教会を批判した。哲學者 *philosophe* と呼ばれる思想家たちは、第一に社会の現状を合理的に診断し、第二に現実を図式的に表現し、第三に具体的な制度改革（共和制）を要求した。より具体的に言えば、宗教性を排除した世俗主義・唯物論的社会的建設、抽象的な真理探究よりも実践可能な現実改変の重視、知識の共有と一般民衆に対する教化への情熱が、この時代を特徴づけている。

加藤はジャン・ゲノー (Jean Chehenno, 1890-1978) を論じたテクストのなかで、合理的思考こそ人間性を証明するという考へのもとに、政治的改革と芸術形式の変化が同期した時代を列挙する。

革命的時代は理性と人間性の不死鳥を、支配階級と古き社會組織の死灰の中から甦へらせる。十五世紀のフィレンツェ、十二世紀の羅馬教會、紀元前四世紀のアテナイが、發見し普遍化し、甦へさせた理性と人間性とを、再び十八世紀のブルジョワジーが自己の原理として宣言し、今、二〇世紀のプロレタリアートが、あらためて獲得しようとしてゐる（34）。

一五世紀のフィレンツェのルネサンスから遡つて一二世紀のカロリング・ルネサンス、プラトンとアリストテレスとアレクサンドロス大王の紀元前四世紀にまで至り、逆にルネサンス以降の例として、



一八世紀末のブルジョワ階級によるフランス革命と並んで、二〇世紀の共産主義革命が語られる。ルネサンスを起点とするのは、おそらくそこがヨーロッパの合理主義の結節点であると見なされたからだろう。「革命的時代」とは、もちろん戦後日本の状況を指す。二〇世紀のプロレタリアート革命と一八世紀のブルジョワ革命を同列に並べていることに驚かされるが、思想の内容ではなく、思想がいかに社会にはたらきかけたかということが、ここでは問題にされているのである。

さらに言えば、文学史における一八世紀とは、ロマン主義に先行する時代である。フランスのロマン主義は一九世紀前半を盛期とし、合理性や規則を追求する革命への反動として、夢や幻想など非合理的な世界をより自由な形式で表現した。しかし、その方法や主題が日本に輸入され、現実逃避の道具となるに至って、加藤は逆に革命を生み出した一八世紀へ遡ろうとした、と推測される。

理性の時代としての一八世紀フランスへの加藤の関心は、やがてコンディヤック (Etienne Bonnot de Condillac, 1714-1780) の翻訳に結実する (コンディヤック『感覚論』上下巻、三宅徳嘉と共訳、一九四八年六月・八月)。フランス文学者加藤周一が最初に公刊した翻訳が、サルトルでもヴェルコールでもなく、コンディヤックであったことの意義は、今までほとんど論じられたことがない。共訳者の三宅は言語学者であり、彼が翻訳企画を先導したとは考えにくい。おそらく加藤が共訳をもちかけたものと思われる。では、加藤はこの翻訳を通じて何を訴えようとしたのだろうか

コンディヤックの『感覚論』(Traité des sensations, 1754) は、無感覚な立像が諸感覚を与えられることよっていかに現実認識を獲得するかを述べた思考実験の書である。第一部第一章から第七章は、嗅覚のみを備えた立像を考察する。立像は物質の観念をもたないが、記憶によつて比較を覚える。比較が欲求を生み、愛と憎悪を生む、という風に、感覚が諸観念の起源となる。愛はアプリアリに人間に内在しているわけではなく、あくまで感覚的経験を通じて獲得される。以下、諸感覚とその結合が考察され、最後に視覚を与えられて、立像は完全な人間として完成する。

ここで重要なのは、ミシェル・ドゥロンが指摘するように、「一八世紀の人間は、かくして各人の精神の相対性へと送り戻され、神学や政治がもたらしていた安定を過去のものとする(35)」ということだ。経験に基づく以上、各人の精神の違いが、真理の違いとなる。理性は、デカルトが述べたように、最初から万人に等しく備わっているのではなく、経験によつて育てられることで能力の差がつくものと考えられる。各人の精神のはたらきを重視することは、そのまま『1946・文学的考察』における加藤の所論に通じる。

加藤は『感覚論』を、まずは「文学」として読んだ。『感覚論』は、實に美しい。第一には、明晰な文體が、第二には、感覚といふただ一つの原理で魂のすべての機能を説明する推論の秩序が(36)」。現実把握と統制された表現能力としての理性が、ここでも注目されている。そして、それが加藤にとつての文学の理想でもあったことは、すでに確認したとおりである。加藤はコンディヤックのうちに、

通説となっているジョン・ロックの経験主義の影響ではなく、デカルトとの類似性を指摘する。そこには、理性の文学の系譜を強調したいという意図が見られる。

デカルトの傳統はコンディヤクの方法のなかに生きてゐるのみならず、存在論のなかにも生きてゐるので、文體と推論の形式との美しさだけが問題なのではない。精神および物質の存在は、この感覺論者にとつて、デカルトの場合のごとく、明證的である。二元論は、コンディヤクのデカルトに通じる第二の點であらう(37)。

心身二元論は物質主義の基礎であるが、これが成立するためには心身を統一するシステムの構築が課題となる。啓蒙主義の哲学を論じたカッシーラーは、「経験的所与を合理的に秩序づけ統制する」ための「厳格な統一性の原理」としての理性こそは、一八世紀思想がデカルトから継承したものである、と指摘している(38)。ただし、異なる点もある。それは、すでに確認したように、理性はあらかじめ備わっているのではなく、各人が獲得すべきものであるという点だ。加藤が合理的なアメリカ人医師の態度に「一八世紀的理性」を見出したのは、そこに観察と考察から得られた認識を、冷静な計算とともに行動へ還元するシステムが機能していたからである。

加藤周一によるコンディヤクの翻訳は、一八世紀フランス思想のなかに、敗戦直後の「革命的時代」であつた日本にも応用可能な

理性の文学のモデルを見出すという、積極的な意味を含んでいた。フランス革命へ向けてあらゆる制度と知の配置を一新しようとした一八世紀フランスは、加藤にとつて戦後日本と重なって見えたはずだ。すべてを刷新した白紙 *tabula rasa* としての戦後の「人民」を啓蒙する知識人としての自負や、マチネ・ポエティク以外の文学者との積極的な付き合いから察するに、一八世紀的な「文芸共和国」の理想さえ抱いていたのかもしれない(39)。『1946・文學的考察』とは「政治的ラディカリズムと文學の古典的概念が、共存し得るといふことの證言(40)」だった、という「あとがき三十年後」の表現は、この一八世紀的理性の夢を指していたのである。

#### おわりに

一九四六年から数年間、加藤周一は原文で読んだフランス文学に依拠しながら、「理性」のはたらきを民主主義と反リアリズム文学とに結びつけた。加藤にとつては、理性的な文学が世界文学であり、論理を積み重ねる民主主義が世界標準の政治体制だった。その際の参照項として、同時代のフランス文学のみならず、一八世紀フランスの啓蒙思想にまで遡行した点は、もっと注目されていいだろう。彼は理性の文学の原点を探っていたのである。

一方で、彼が表明した文学観が同時期の自身の創作にどれくらい反映し、実現されているかということは、今後検討していかなければならない課題だろう。最後に付け加えておきたいのが、フランス

留学（一九五一—五五）からの帰国後は、西欧化の徹底による実作者としての理性的文学を創造するかわりに、フランス文学史の方法に依拠して日本文学を再解釈するようになった、ということだ。一九六〇年代に北米の大学で日本文学を講じる立場になった加藤は、日本文化の伝統のなかに潜在する理性的な著作の系譜を『日本文学史序説』のなかで提示するに至った<sup>(4)</sup>。その出発点には、一九四〇年代後半の戦略的ともいえる「理性」の時期があったのである。

## 注

- (1) 加藤周一・中村真一郎・福永武彦『1946・文學的考察』、真善美社、一九四七年、一頁。
- (2) 加藤周一「新しき星莖派に就いて」（一九四六年七月）、『1946・文學的考察』、前掲書、九—一〇頁。
- (3) 粟津則雄「福永武彦をめぐって」、近藤圭一ほか編『福永武彦を語る 2009-2012』、澤標、二〇一二年、八二頁。
- (4) 福永武彦「文学の交流」、『1946・文學的考察』、前掲書、二六頁。
- (5) 中村真一郎「もう一人のモオリヤック」、『1946・文學的考察』、前掲書、七七頁。
- (6) 「私たちは街路でも喫茶店でも電車のなかでも、無闇と外国語の、それもなるべく古典語の単語を多用して喋り合った。「軍」という

代りに「ミレース」というたぐいである。」中村真一郎『愛と美と文学——わが回想』、岩波新書、一九八九年、一四五頁。

(7) 加藤周一「フランスから遠く、しかし……」（一九八一年）、『羊の歌』異聞、ちくま文庫、二〇一一年、八三頁。

(8) 「私が読んだのは、主に《N・R・F》と《ウーロップ》である。大学のフランス文学研究室にかなりの数の「バック・ナンバー」があり、東京神田の古本屋でもときどき何冊かを見かけることがあった。「略」私は三六年の《ウーロップ》を三六年に読んだのではなく、数年経って、おそらく太平洋戦争の前夜に、拾い読みしたのである。」加藤周一「フランスから遠く、しかし……」、前掲書、八五—八八頁。

(9) 竹内好「ある挑戦——魯迅研究の方法について」（一九四九）、『竹内好全集』第六卷、一八五—一八六頁。

(10) 中村光夫「一九四六年」、『文學界』（一九四七年九月）、曾根博義編『文藝時評大系 昭和篇Ⅱ』、第二卷、ゆまに書房、二〇〇八年。

(11) 平田次三郎「文藝時評」、『進路』（一九四八年一月）、曾根博義編『文藝時評大系 昭和篇Ⅱ』、第三卷、ゆまに書房、二〇〇八年。

(12) 伊吹武彦ほか、座談会「世界文学への道」、『世界文学』第八号、一九四七年一月。

(13) つださうきち「世界文学としてのニホン文学」、『文学』第十五卷第一号、一九四七年一月。

(14) 十返肇「戦後文学の観念性」、『文藝首都』（一九四八年六月）、『文藝時評大系 昭和篇Ⅱ』、第三卷、前掲書。

- (15) 加藤周一「序(現代フランス文學の問題)」、『現代フランス文學論 I』、銀杏書房、一九四八年、七一八頁。
- (16) 小田切秀雄「文化時評」、『季刊文學』(一九四八年三月)、『文藝時評大系 昭和篇Ⅱ』第二卷、前掲書。
- (17) 加藤周一「焼跡の美学」(一九四六年十一月)、『1946・文學的考察』、前掲書、九五頁。
- (18) 加藤周一「我々も亦、我々のマンドリンを持つてゐる」(一九四六年十二月)、『1946・文學的考察』、前掲書、一四四頁。
- (19) 加藤周一「焼跡の美学」、『1946・文學的考察』、前掲書、九五頁。
- (20) 三谷太一郎『日本の近代とは何であったか』、岩波新書、二〇一七年、二二二頁。
- (21) 加藤周一「新しき星莖派に就いて」、『1946・文學的考察』、前掲書、九頁。
- (22) 加藤周一「一九四五年のウエルギリウス」(一九四六年九月)、『1946・文學的考察』、前掲書、七六頁。
- (23) 加藤周一「我々も亦、我々のマンドリンを持つてゐる」、『1946・文學的考察』、前掲書、一四二頁。
- (24) これについては、岩津航「加藤周一とヴァレリー——知性の仕事としての象徴主義」、坂巻康司編『近代日本とフランス象徴主義』、水声社、二〇一六年、一八四—二〇五頁、を参照。
- (25) 加藤周一「革命の文學と文學の革命——森有正、石川淳兩氏の文體」、『帝國大學新聞』(一九四六年十一月)、曾根博義編『文藝時評

- 大系 昭和篇Ⅱ』第一卷、ゆまに書房、二〇〇八年。
- (26) 加藤周一「リアリズムと小説」、『文學と現實』(一九四八年)、二三頁。
- (27) 加藤周一「寓話的精神」(一九四七年五月)、『1946・文學的考察』、前掲書、二四九頁。
- (28) 加藤周一「知識人の任務」(一九四七年五月)、『1946・文學的考察』、前掲書、一八〇頁。
- (29) 加藤周一「新しき星莖派に就いて」、『1946・文學的考察』、前掲書、一四—一五頁。
- (30) 加藤周一「焼跡の美学」、『1946・文學的考察』、前掲書、九七頁。
- (31) 海老坂武「加藤周一——二十世紀を問う」、岩波新書、二〇一三年、六五頁。
- (32) 成田龍一「加藤周一を記憶する」、講談社現代新書、二〇一五年、五六—五九頁。
- (33) 加藤周一「亜米利加に學び理性をもとめるための方法紋説」(一九四七年六月)、『文學と現實』、前掲書、二二七頁。
- (34) 加藤周一「ジャン・グノーと批評」(一九四六年九月)、『現代フランス文學論 I』、前掲書、一五九—一六〇頁。
- (35) Jean-Yves Tadié (dir.), *La littérature française : dynamique & histoire II, avec les contributions de Michel Delon, Françoise Mélonio, Bertrand Marchal, Jacques Noiray, Antoine Compagnon, Gallimard, 2007, p. 88.*
- (36) 加藤周一「コンディヤク『感覺論』に就いて」、コンディヤク『感

覚論』下巻、加藤周一・三宅徳嘉訳、創元社、一九四八年、一五五—一五六頁。

(37) 加藤周一「コンディヤク『感覚論』に就いて」、前掲書、一五六—一五七頁。

(38) E・カッシーラー『啓蒙主義の哲学』、中野好之訳、紀ノ國屋書店、一九六二年、二六—二七頁。

(39) Jean-Charles Damon et Michel Delon (dir.), *Histoire de la France littéraire : Classicismes XVII<sup>e</sup> - XVIII<sup>e</sup> siècle*, Presses Universitaires de France, 2006, p. 97-98. 一九四六年の文学者との交流については、加藤周一『統羊の歌』、岩波新書、一九六八年、二五—二九頁、を参照。

(40) 加藤周一・中村眞一郎・福永武彦「あとがき三十年後」、『1946・文学的考察』、富山房百科文庫、一九七七年、二三七—二三八頁。

(41) これについては、岩津航「加藤周一とフランス文学史——『日本文学史序説』の方法について」、『金沢大学歴史言語文化学系論集 言語・文学篇』第九号、二〇一七年、を参照。

\* 本論文は、日本近代文学会全国大会（二〇一七年五月二七日、東京外国語大学）における西岡亜紀、戸塚学とのパネル発表『1946・文学的考察』における「世界文学」のプログラムのための研究発表「外国語・理性・民主主義——加藤周一の世界文学」、および日仏文化講座（日仏会館、二〇一七年十月二日）における講演「加

藤周一と一八世紀フランス的理性」を基にしている。執筆に際して、来聴者の方々の質問や指摘が大変有益であった。記して謝意を述べたい。なお、本論文はJSPS科研費16K02613の助成を受けたものである。